

「ゴダンさん、コーヒー飲みませんか？ 今、私  
がいられますから。インスタントやけど。もう  
八時やから、ここでおったら、すぐ弁慶さんの  
三味線が聞けます」

すき焼きの宴会ではぎやかなお囃子が聞こえ  
ているのだが、八時すぎには弁慶の三味線で  
とも蝶ねえさんの小唄がはじまるはずと聡子は  
いつものならいとして知っていた。

「アリガトウ」

ゴダンさんはニコツとして、聡子の誘いを受け  
た。

「ベンケイさん、オコリマシタ。ワタシノセイデ

人なんだから、ばあちゃんに何が何でも助けても  
らって弁慶さんに頼んでもらわんとあかんと、そ  
ういう気持ちが強くなるのだった。

聡子が続けて言おうとした時、三味線の  
音色がしはじめた。それにしっかりと寄り添うよ  
うに、とも蝶さんの声があとに続く。

聡子もゴダンさんも耳を澄ました。

にぎやかだった小広間もしーんとしている。

ゴダンさんは大きく目を見開き、小広間の方に  
体を向け、そのしゃんとした背筋をさらにきちん

シヨウカ？」

聡子がいられたコーヒーを受け取りながら帳場の  
前にあるソファアに腰掛けて、交換台のところの  
聡子に向かい合った格好のゴダンさんがゆっくり  
とたずねた。

「弁慶さんはちよつと気難しいんや。気にせんほ  
うがええです。芸術家やからね。うん」

「ソウデスカ…」

「心配せんでもばあちゃんがうまいことしてくれ  
るわ」

「ハイ、ヨロシクオネガイシマス」

聡子はなんて立派な人なんだろう、こんない

とさせて聞き入っている。そして、ひどく小さな声  
で、  
「ワタシガテレビデキイタキヨク」  
と聡子に言った。

「おんなじ曲なの？」

「ハイ」

「いつもの十八番の小唄ではないなあ。なんや  
ろ？」

「カガミジシ」

「鏡獅子？」

「ハイ、カガミジシノイチブデス。ソレセイリヨ  
ウザンノノトコロデス」

ゴダンさんの顔は少し頬が赤くなっていた。丸

いめがねの奥の瞳が涙でにじんでいるように  
聡子には思えた。

(十)

次の日の朝早く、佐藤さんたち団体よりも先に、  
下の小広間に朝食をとりに来たゴダンさんに、  
タカが声をかけた。

「ゆうべはすんません。遅うまで、にぎやかで」

タカは両手で三味線を構えている格好をしながら、  
頭を下げた。

封筒を出し、そこから一万円抜き出すと、ゴダン  
さんに向かって、  
「これなあ、前金の二万のうちの一萬。二泊され  
たから一萬はもうとうときますけど、残りは返しませ  
すわ」  
「なぜデスカ？」

タカはニコツとしてから、普段の早口よりは  
随分ゆつくりとした口調で、

「賭け、賭けですわ」

「カケ？」

「はい、きょうから賭けです。宿泊料はもうい  
りませんのんや。きょうから、ゴダンさんに向

「イエエ、ウエデヨクキキマシタ」  
ゴダンさんは微笑んでいる。

「あのね。ゴダンさん、きのうは弁慶が失礼しま  
したね。あれはほれ、ちと気難しいところがあつ  
て」

「ゲイジユツカ？」

タカははつと気づいたような顔をして、  
「そうそう、それ、へえ、なんせものすごいゲイ  
ジツ家ですからな。すぐ気がかわるんですわ」  
「ハイ」

ゴダンさんは少し小首をかしげながら、答えた。  
そうして、タカは着物の胸元からこそこそと茶

の仕事してもらうて、それで十日シンボウして、  
へえ、辛抱、辛抱して、その仕事ができたら、弁慶  
が三味線弾くんです」

その言葉は裏の洗面所の方から出てきた聡子や  
おいせさんの耳にも入った。ばあちゃん、  
単刀直入やな！ 聡子は固唾を飲んだ。

「ワタシガタカさんヲテツダウノデイイノデス  
カ」

「へえ、まあ、ワタシよりはおいせさんやトミさ  
んの仕事デス」

ちよつとタカのイントネーションが妙である。

ゴダンさんは「フーン…」と腕組みをしている。  
「ワタシガスルコトハドンナコトデスカ、タトエ  
バ？」

「オゼンハコビー！」

聡子はタカの話し方のほうが変なので可笑しく  
なった。お伊セは笑いをかみ殺して聞き入ってい  
る。

しばらくゴダンさんは黙って考えていた。横顔  
がまるで聡子の高校の美術室の写真にあるギリシ  
ヤの彫像のようである。

なんだか断られそうな空気がして、聡子はこわ  
くなっている。ここに立って、お伊セおばちゃん

返り、にやりと笑って答えた。

「聡子ねえちゃん、私はパスでっせー」

すし辰の子どもたちとのトランプでおぼえた

言葉である。

(十一)

ゴダンさんがお膳運びや廊下の雑巾がけ、それ  
に洗い場の仕事の手伝いをしはじめて、三日経っ  
た。

と聞いていてもいいのだろうか？

と、ゴダンさんは

「ワタシ、チカラシゴトデキルトオモイマス。ソ  
ウイウコトガイイデス」

「なら、ゴダンさん、オツケーか？」

「ハイ、ヤリマス」

お伊セさんが、その言葉を聞いて、やっと体を  
動かして、聡子をつついた。そして、小さな声で、

「聡子ねえちゃん、これでトミちゃんとトンボは  
んはまたお好み焼の賭けになりましたっせ」

「お伊セおばちゃんは？」

お伊セさんはもう表の方へ竹ぼうきを取りに  
行くこうとしている。そして、この聡子の問いに振り

ゴダンさんはなんの苦勞もなさそうで、一日で  
音をあげると踏んでいたトンボさんは青くなっ  
ている。

逆に二三日はもつとかけたトミちゃんはたま  
らなく嬉しそうでである。

玄関先をトミちゃんのはろりのろりと竹ぼうき  
で掃きながら、近所の八百屋へ買い足しのお使い  
にでかけるといってお伊セさんを呼び止めて、

「あんた、あのゴダンさん、十日もちそうやで！  
一人ではじめからお膳を十も持てる人はあんま

りおらん。ほんまに背が高いちゅうのは、大したモンやで」

お伊せさんはくちやくちやと顔がしわだらけになるくらい笑顔で、トミちゃんに答える。

「トミちゃん、あのお方、キリンさんがお膳持つてるみたいやろ！」

「いやいや、キリンより、段ばしごさんや」

「段ばしごさんかあ！ トミちゃん、冴えてるやないか！ トンボさんは青息吐息やで。へへへ」

「ほんでもなあ、お伊せはん、あの段ばしごさん、なんやら、怖いところから逃げてきたんやろ、モノ

「トミちゃん、早よせんかな！」

突然、タカの声がして、トミちゃんははっとした。

でもにこにこしているタカが後ろに立っている。

ゴダンさんが次々用を足してくれるので、機嫌はよいのだ。

「トミちゃん、表が終わったら、ゴダンさんにもり台の運び方、教えたつてな。きょうは団体さんが六十人やから、もり台を板場から配膳場を持ち出してもらお」

ゴダンさんはこっくりとうなずいている。

トリがどうのつて、御家はんがゆうてた。ほなここでも辛抱せなあかんやろて、私は踏んだんや」

いい勘違いもあつたものである。お伊せさんはトミちゃんの勘違いに吹き出したが、時間がないので、もう行くわとせわしない下駄の音を立てて出て行った。

「いてらっしゃい！」

ああ、これやつたら、お好み焼の負けの分、取り戻せるのやつたなあ。三枚くらいかけてもよかつたな…とトミちゃんはぶつぶつ独り言を言っていた。

これは十日以上でもいけそうや！

トミちゃんは自分が勝算ありともう確信している。

トミちゃんや臨時の静子さんたちはゴダンさんはカナダの大学を出ているのに大阪でまた大学に行っていることや、それでも弁慶さんに会いに琴平まで来て、会えるまで、御家さんの賭けに素直に乗って、すし辰で仲居を手伝っていることをほんとに不思議がつてよそよそしくしていたが、夕べ偶然ゴダンさんの口から、カナダの故郷の家は

農家なんだと聞いて、急に気味悪がらなくなったのである。

臨時さんの中には、今朝、ゴダンさんにあげて…と言いながら、自分のところでとれたいちじくまで持ってくるものまでいた。

さすがのタカも手放しで誉めたのは、彼女の働きぶりもさることながら、ゴダンさんが宿泊料なしで十日待たせてもらえるのなら、この仕事をするのは、まったく当然のことだという解釈をしてくれたことにあった。自分はいずれにせよ、

二週間しか休みがないが、休みの間にこうして

有意義でまたとない体験ができるのはかえって嬉しいことである。ゴダンさんは正直な自分の言葉で淡々とタカに語ったのである。

タカは毎朝勝ち誇ったように、虎の子のネスカフェをまた頂戴している倉之助に向かって、同じようなことを繰り返し言った。

「あんたなあ、あのゴダンさんは甲斐性があるで。なんせ、ガイジンさんのほうが、理屈がようわかってるで、なんやらカナダにはオッペツケペーと

かいう仕事がよくあるんやって。学生が住み込みで留学して、そこで子守りはんやお手伝いして、下宿代を払わずに暮らすのやって。あの人、そうゆうてたわ」

オヘアのことであろう。倉之助は飲んでいるコーヒーを吹き出しそうになった。すし辰の昼あんどんなど陰口をたたかれながらも、読書家なので何でも大概のことは知っている。

(以上12月31日放送分)